

教員氏名：吉井 健人（児童教育専攻／教授）

1. 教育の責任（何をやっているか）

担当科目と指導内容

教育学部に所属し、主に、教育実習などに関する教員養成において重要となる年次の体育・保健体育科教育法や授業観察演習、授業実践演習、初等教育実習事前事後指導を担当している。また、情報通信技術を活用した教育の理論及び方法（小・中高）や、初等中学校体験活動 A（小）、初等教育実習、教職実践演習（小）も受け持ち、学校現場と結び付いた実践的な学びを重視している。また、学生指導の中核となるゼミとして『教育方法研究Ⅰ・Ⅱ』や『卒業研究』を担当し、卒業論文の指導やキャリア形成に関する支援を行っている。加えて、後期集中講義のスキー実習「生涯スポーツⅡ」においても、学生の指導等を担当している。

課外活動の指導

課外活動では、教職サークルを担当し、1年生から4年生までを対象に、前期・後期に週4コマ、さらに夏季休暇および春季休暇には週6コマ程度の教員採用試験対策を行っている。活動内容としては、1次試験対策では小学校専門科目や中学校保健体育専門に関する類似問題を作成し、解説を行うことで基礎力の強化を図っている。また、2次試験対策では、個別面接や集団面接に向けた練習をはじめ、模擬授業や場面指導への対応力を高める演習を実施し、実践的な指導を行っている。このように、学年や試験段階に応じた体系的な支援を通して、学生が安心して試験に臨めるよう幅広いサポートを担っている。

2. 教育の理念（なぜやっているか）

専門分野の研究者としての理念

体育科教育学を専門とし、批判的思考や学習指導論、スポーツ教育学を中心に研究を行ってきた。授業実践における指導法や評価法の検討と並行して、ICTを活用した学習支援や態度形成に関する研究にも取り組み、理論と実践を往還しながら体育授業の改善に資する知見を蓄積している。当初は、小学校高学年の陸上運動や体づくり運動を対象とした授業プログラムの効果検証や技能習得の可能性に焦点を当てていたが、その後、児童・生徒が主体的に学びを深め、批判的に考える力を育成するにはどのような学習指導モデルや評

価値観が有効かについて関心を広げ、研究テーマや方法を発展させてきている。

学生の学習に対する理念

私は、学生一人ひとりが主体的に問いを立て、自ら考え、仲間と協働しながら学びを深めていく力を育むことを理念としている。特に体育科教育学の研究で扱ってきた「批判的思考」の育成は、単なる技能習得にとどまらず、学習内容を吟味し、自らの学びを改善していく姿勢を培うものとする。また、ICT を活用した授業実践や評価の研究を通して、学生が多面的に自分の学びを振り返り、次の課題に向けて自己調整できる環境を重視している。さらに、教員養成においては、実習や採用試験対策を通じて、教育現場で求められる実践力と柔軟な思考力を磨くことを支援し、学生が将来の教育者として自信を持って歩み出せるよう導いていきたいと考えている。

3. 教育の方法（どのようにやっているか）

具体的な教育上の実践や教材の工夫

① 授業内での自己省察と批判的思考を促すワークシートの活用

体育科教育学関連の授業では、単なる技能習得にとどまらず、学習内容をどのように理解し、次の実践に活かせるかを意識させることを重視している。そのため、授業後には「振り返りシート」を配付し、学んだ内容の要点整理に加えて「今日の授業で疑問に思ったこと」「別の授業や教育現場でどう活用できるか」といった問いを設定している。これにより、学生が主体的に学習内容を再構成し、批判的に考える習慣を身につけられるよう工夫している。

② ICT を活用した授業映像の分析とフィードバック

授業実践演習や模擬授業では、タブレットやスマートフォンで授業の様子を撮影し、学生自身に映像を見直させる時間を設けている。その際、「児童に分かりやすく伝えられているか」「児童の反応をどのように引き出しているか」などの観点を与え、自己評価と相互評価を組み合わせさせて考察させる。これにより、学生は自らの授業改善点を具体的に把握し、教育現場に即した指導力を高めることを意図している。

4. 教育の成果（行った結果どうだったか）

学生の学習成果

担当する授業において、学生の学習成果には大きな幅がみられる。特に近年は、期待を超える成果を示す学生と、そうでない学生との二極化が見られる。例えば、小学校体育科教育学関連の科目や授業実践演習での成果を振り返ると、主体的に課題に取り組み、自らの授業を映像で振り返りながら改善点を具体的に抽出できる学生がいる一方で、観点を与えても十分に活用できず、学習内容を定着させられない学生も一定数存在する。高い成果を挙げる学生の特徴としては、批判的に物事を捉える姿勢を持ち、授業中の問いかけに対して自分なりの根拠をもって意見を述べることができる点が挙げられる。これらの学生は、ICT を活用した授業映像の分析や振り返りワークシートを効果的に使い、知識や技能だけでなく、自己省察力を高めている。一方で、十分に成果を挙げられない学生は、用語や基本的知識を覚えること自体に苦手意識を持つ場合や、記述問題に取り組む際に日本語表現力の不足が顕在化する場合がある。さらに、課題に直面した時点で意欲を失い、最初から諦めてしまう傾向も見受けられる。

このように、学生の学習成果には個々の学習態度や基礎力の差が色濃く反映されており、今後は多様な層に応じた指導方略を講じる必要がある。特に、記憶や表現の弱さに対応する補助教材の工夫や、学習意欲を高めるための動機付けの仕組みづくりを通じて、全ての学生が着実に成長できるよう支援していきたいと考えている。

学生による授業への評価

体育科教育学や授業実践演習においては、理論を扱う際にもできる限り具体的な事例や映像教材を提示し、抽象的になりすぎないように配慮している。その結果、授業アンケートでは、学生からの評価は概ね全体平均を上回る数値となっており、特に「分かりやすさ」や「学びを振り返る機会が多い」といった点で高い評価を得ている。一方で、授業に十分対応できていない学生や基礎学力に課題を抱える学生からは、理解の難しさや進度に関する指摘が見られることもある。こうした個別の意見は、今後の授業改善の重要な手がかりであり、批判的思考を育成するための問いの提示方法や ICT を用いた補助教材の工夫につなげている。今後も多様な学生の学びを支える授業づくりを目指し、教育者養成に資する授業構築を継続していきたい。

5. 教育における今後の目標（これからどうするのか）

指導方法と教育内容のさらなる向上

今後は、体育科教育学を基盤に批判的思考力や表現力を育成できる指導法をさらに発展させたい。特に ICT を活用した授業映像の分析や双方向的教材を充実させ、学生が自ら学びを振り返れる環境を整備する。また教育実習や演習と連動させ、理論と実践を結びつけた教育内容の質的向上を図りたい。

学生の主体的な学びの支援

学生が課題を見出し主体的に学び続ける姿勢を育むため、振り返りや課題設定を通して自己省察を促している。今後は個別に応じたフィードバックを強化し、学生が自分の強みと課題を把握しながら成長できるよう支援し、教育者としての専門性を高める基盤を築いていきたい。

【添付資料】 ※全部又は一部の現物を省略しています。

1 担当科目のシラバス

(2025 年 9 月 22 日現在)